# パスカルと真理

## Pascal et la vérité

山田 弘明

### 序

あることがらが「真である」とは、それが「確実である」ということだろう。真であることと確実であることとは同義語であるかのようである。デカルトは「真で確実な知識」(*Meditationes*.V.AT.VII.pp.69－70)としばしば並記し、パスカルも「確実で真なるもの」(*Au Père Noël 29 octobre 1647*.M.II.p.519) (1) という言い方をすることがある。かれらにおいて、それらの言葉は互いに相関しているということだろう。ではパスカルにおける真理とは何か。かれのテキストには真理についての言及箇所は多い。「子午線ひとつが真理を決定する」(L60-B294)、「真理は微妙な尖端である」(L44-B82)、「真理が何であるかを誰か知る」(*Entretien avec M.de Sacy*.M.III p.142)などは有名である。だが、真理についてのまとまった議論と言えるものはあまり見当たらない。デカルトやスピノザのように、真理という言葉で何を意味するかについて特に意味論的な究明がなされているわけではないし、真理の対応説や整合説が論じられるわけでもない。およそパスカルが求めていたのは「哲学の問題」として認識論的に分析された真理ではなく、「全存在にかかわる」(L150-B226)いわば生きた真理であったからであろう。

結果的に見て、パスカルは真理を四つの視点から論じていると思われる (2)。第一は懐疑論の視点である。かれの思想の基調として、真理というものは相対的であって容易に懐疑論の対象になるという一貫した強い主張がある。第二は幾何学的真理の視点である。理性による推論はそれが明証的であるかぎり真と認められる。しかし同時に、懐疑論的反省によって理性そのもの限界が強く自覚される。第三は直感的真理を不可疑とする視点である。それは心情という原理によって感得される真理のことである。たとえば「空間」や「時間」のよう

な第一原理は心情によって知られ、神は心情において感じられる。そしてこれらの真理は懐疑論によっても疑われることはないとされる。第四は信仰の真理の視点である。これは第三の真理の延長線上に来るもので、啓示によって示される愛の秩序である。これが最も重要な視点であることは言うまでもない。ところで、真理が魂に受け入れられる門として精神(esprit)と心情(cœur)との二つがあり、神学的真理は精神から心情へ入るのではなく、心情から精神へ入る真理である(*De l'esprit géométrique*.M.II.pp.414－415)。この比喩で言うなら、幾何学的真理は精神という門から入る真理であろう。デカルト的な理性によって幾何学は明晰に論証され、万人に納得されるからである[3]。これに対して心情の門から入ってくる真理とは、第一原理や神を知る直感的真理であり、啓示神学の真理である。啓示的真理は、知って愛するのではなく愛して知る（心情から精神へ）というヴェクトルをとる。パスカルが最も言いたいのは、超自然的な愛の秩序におけるこの真理こそ「全存在にかかわる」本質的真理であり、実体的真理であるいうことである。ここに本当の意味での確実性があると考えられていると思われる。

以下、デカルトを意識しながら、真理の四つの視点をパスカルのテキストについて詳しく吟味しよう。

### (1) 真理の相対性と懐疑論

真理は相対的である、真理の絶対的基準はない、真理は知りえないという主張が懐疑論（ピュロニスム）のものであるならば、パスカルはまさに懐疑論を表明しているように見える。

真理は相対的であって、真理の普遍的基準は存在しないという見解については、モンテーニュ[4]に関連した断章が多く残されている。

> 子午線ひとつが真理を決定する。・・川ひとつで仕切られる滑稽な正義よ。ピレネー山脈のこちら側での真理が、あちら側では誤謬である。L60-B294
>
> 民衆は、真理は見い出されうるものであり、それは法律や習慣のなかにあると信じているので、これらのものを信じ、それらの古さを真理の証拠として受け取っているのである。こうして民衆はこれらのものに従

う。だが、これらのものが何の価値もないことを、人がかれらに示すやいなや、すぐに反逆する傾向をもっている。L525-B325

遠すぎるところから、あるいは近すぎるところから見た絵の場合も同じである。そして真の場所は、不可分な一点しかない。・・絵画の技術では、遠近法がその一点を指定する。だが、真理や道徳においては、だれがそれを指定するのだろう。L21-B381

矛盾があるということは、真理を見分けるよいしるしではない。多くの確かなことが矛盾している。多くの嘘が矛盾なしにまかり通っている。矛盾のあることが嘘のしるしでもなければ、矛盾のないことが真理のしるしでもない。L177-B384

昔からの風習や習慣が真理を決め、真理の証拠(preuve)は確立された法律や権威にある、という考え方をパスカルは事実として認めながら、無価値であると攻撃している。というのも、その証拠の内実には真理の絶対的決め手はないからであり、真理を精確に描写する遠近法の定点はないからである。真理の基準は矛盾律にある、と後のライプニッツは考えた。論理的にはそうであろうし、パスカルはそれを否定するのではない。むしろ歴史の矛盾などが示すように、矛盾のあるなしが決して真理の決め手にはなっていない、と言いたいのである。真理を判別すべき定点はやはり見い出されない。真理そのものが存在しないと言うのではない。真理を測る究極の基準がわれわれにおいて見い出せないと言うのである。その理由は、われわれの認識の道具（想像力、感覚、理性）の本来的不備にある、とパスカルは考える。

想像力。・・もしそれが嘘のまちがいない基準だったら、真理のまちがいない基準となっただろうから。・・想像力は人々を説得する偉大な才能を発揮するのである。理性がいかにわめいてもむだで、理性には物事に値段をつけることはできない。・・真理と正義とは、実に微妙な二つの尖端であって、われわれの道具は、それにぴったり触れるには、磨滅しすぎている。L44-B82

真理はきわめて微妙なので、少しでもそこからはずれれば誤謬に陥るのです。しかし、この誤謬になるのも紙一重のところなので、大して離れなくとも真理になるのです。*Les Provinciales*. La 3ème Lettre. OC. p.380

人間は恩恵なしには消しがたい、生来の誤謬にみちた存在でしかない。

何ものもかれに真理を示さない。すべてがかれを欺く。真理の二つの原理である理性と感覚とは、それぞれ誠実性を欠く上に、相互に欺き合っている。感覚は偽の外観でもって理性を欺く。感覚が理性に持ってくるこのまやかしは、それと同じものを今度は感覚が理性から受け取るのである。理性が仕返しするのだ。精神の情念が感覚を乱し、偽りの印象を与える。かれらは競って嘘をつき、だましあっている。L45-B83

モンテーニュは、想像力や感覚が理性にもまさって人間を説得することを多くの例によって示したが、パスカルもこの考え方を継承する[5]。ここではとくに想像力の力強さが強調されている。すなわち、それは真理の基準ではないにしても、説得の基準になっている。理性は想像力に強く影響されるあまり、ものを公平に評価することができない。「理性はみずからを基準として申し出るが、あらゆる方向へ曲げられやすいものである」(L530-B274)。感覚はものの本質ではなく現われを示すのみであって、たとえば錯覚によって理性は容易に欺かれる。逆に、悲しいときにはすべてが灰色に見えるように、精神の情念が感覚を撹乱することもあるとパスカルは考える[6]。想像力は言うに及ばず、感覚も理性も真理の原理(principe)でありながら、真理の絶対的基準にはなりえない。要するに真理は、われわれが触れることができない微妙な尖端(pointe si subtile)である。真理は針の先のように鋭くとがっていて、誤謬と紙一重のところにある。きめの粗いわれわれの精神では、繊細な真理を精確に捉えることができない。結局パスカルは、恩寵(grâce)なしには人間は誤謬に満ちた存在であり、本来的に真理を知りえない。懐疑論は人間のこうした状況を知らしめる、と結論する。この思考方法もモンテーニュのものである。

もっとも、だからと言って人間はまるで真理を知りえないというわけではない。部分と全体という見方をすれば、人間は完全に無知なのではなく、部分的には真理を知ることができる。ただ全体をなかなか知ることができないのである。

懐疑論。この世では、一つ一つのものが部分的に真であり、部分的に偽である。本質的真理はそうではない。それはまったく純粋で、まったく真である。この混合は真理を破壊し、絶滅する。したがって何ものも純粋な真理の意味においては、真でない。・・・ われわれは、真も善も部分的に、そして悪と偽と混じったものとしてしか持っていない。

L905-B385

実体的真理というものは、いったい存在しないのだろうか。真理そのものではないが、真ではあるものが、こんなにたくさん見えるのに。

L418-B233

もし君たちが真理を知るということに、たいして関心がないならば、そのへんで君たちを休ませてしまってもいいところである。しかし、もし君たちが全心から真理を知りたいのだったら、それだけでは十分細部にわたって検討したことにならない。哲学の問題としてならそれで十分だったろうが、ここでは全体が問題なのである。それなのに、この種の軽い考えの後に、人々は楽しみを求めるのだろう。L150- B226

われわれが知りえるのは部分的真理にすぎず、しかもそこには必ず誤謬が混在している。真と偽のまだら模様が描かれている。それが真理が相対的だということの意味でもある。まったく混じり気のない純粋な真理、本質的真理(vérité essentielle)というものを見い出すのは困難である。学問的真理と言われるものも部分的真理にすぎない。そこには偽も混じっている可能性がある。全体とは必ずしも部分の集合という意味ではない。むしろ部分という有限を越えた無限なる全体である。幾何学の第一原理のように、真であるもの(chose vraie)ではなく、真理そのもの(vérité même)が問題であり、実体的真理(vérité substantielle)が問題であるとパスカルは言う。真理の部分的な現われではなく、もの自体としての真理が問われている。それは有限な経験的世界を越えたことである。それは前田が指摘するように、キリスト教に具現された愛のことであろう[7]。実体的真理は信仰の真理として存在すると考えられている。およそパスカルが求めているのは学問的真理ではないし、哲学の問題(question de philosophie)でもない。全体が問題である(ici où il va de tout)と言われる。その意味するところは、神を全心で求めることが「われわれ自身の問題であり、われわれの全存在にかかわる問題」(L427-B194)である、ということであろう。やはり「全体」は信仰の問題に収斂する。

かくしてパスカルは、恩寵に浴しない人間は、究極の真理に達しえないという哲学的ピュロニスムを表明することになる。

われわれのうちに真理の原理があるかどうか。また万人において一致するところから公理あるいは共通観念と呼んで信じているものは、果たし

て本質的真理に一致するものかどうか。そしてわれわれは信仰によってはじめて、至善の存在がわれわれを真理を知るために創造し、これらのものを真のものとして授けたもうたということを知るのである以上、その光明なしには、われわれは偶然に(à l'aventure)形成されたので、これらは不確実なのではなかろうか、あるいは陰険邪悪な存在(un être faux et méchant)によって形成されたので、われわれをたぶらかすために偽物が与えられているのではなかろうか、ということをだれが知ろうか、などとかれ（モンテーニュ）は問います。これによって神と真理とが不可分(Dieu et le vrai sont inséparables)であり、神が存在するかしないか、不確実か確実かに応じて、真理も必然的に同様となることが明らかにされるのです。それゆえにわれわれが真理の判定者として取り扱っている常識も、それを創造したものからこれについてその存在を受けているかどうかをだれが知っていましょう。その上にまた、真理とは何であるかをだれが知っていましょう(qui sait œ que c'est que vérité)、そしてそれを知らずにどうして真理を見ているということを確かめうるのでしょう。*Entretien avec M.de Sacy*.M.III.pp.141－142

ここにはモンテーニュよりもデカルトの思想がある。信仰の光なしに考えた場合、懐疑論に陥らざるを得ないことが強く肯定されている。その意味で「懐疑論は本当である」(L691-B432)。デカルトはコギトによって懐疑論に対抗したが、パスカルは信仰の光なしには、われわれは真理の原理(principe)をうちに持たず、われわれが捉える真理は公理といえども本質的真理とは言えないと考える。なぜなら、われわれの存在の起源が神であるか否かによって、真理は根本から左右されるからである。このように真理の問題と神の問題とは密接に関係している。真理と神とが不可分(inséparable)であるという主張は、デカルトの永遠真理創造説にもつながる重要な思想であろう。真理を真理として設定するのは神である。それゆえ神と独立に真理を語ることはできず、神の何たるかを知らないかぎり、真理の何たるかも知りえないのである。注意すべきは、先述したようにデカルトがこの神を哲学の問題としたのに対して、パスカルはそれを信仰の問題と解したことである。同じ議論はパンセにおいてもなされている。

懐疑論者たちの主な力は、些細なものは放っておくが、次のようなものである。すなわち、これらの原理が真であることについてわれわれは、

信仰と啓示とによらないかぎり、われわれが自分自身のなかでそれらの原理を自然に感知するということ以外には何も確証を持っていない。ところが、この自然的直感も、それらの原理が真理であるということの確証にはならない。なぜなら、人間が善き神により、邪悪な鬼神により、あるいは偶然に創造されたものであるかについては、信仰によらないかぎり確実性がない以上、これらの原理も、われわれの起源に応じて、われわれに真のものとして授けられたものであるか、偽物としてであるか、不確実なものとしてであるかが疑わしいからである。その上、何びとも信仰によらないかぎり、自分が目覚めているのか、眠っているのかということについて確信が持てない。なぜなら、人は眠っているあいだでも、われわれが現在しているのと同じようにしっかりと、目が覚めているものと信じているからである。・・であるから、われわれがみずから認めているように、一生の半分は眠りのなかで過ごされ、そこでは、その時にわれわれが感じることがすべて錯覚である以上、何がどう見えようとわれわれは真理の観念を一つとして持たないのである。・・・

人間は確実に真理を所有していると言うのだろうか。ただわずかばかり突つかれただけで、何の資格も示すことができず、つかんでいるものを手放してしまわなければならないこの人間が。・・・真理の保管者であり、不確実と誤謬との掃きだめ。・・・だから懐疑論者たちに対してかれらがあんなに盛んに叫んだことを承認してやるべきである。すなわち、真理はわれわれの力の及ぶ範囲にはなく、われわれの獲物でもない。それは地上には留まらず、天の一族で、神の懐に宿り、人はそれを神が思召しによって啓示してくださる程度にしか知ることができないのである。それならば、創造されたものでなく、しかも肉となった真理（キリスト）から、われわれの真の本性を教えてもらおう。

もし人間がいまだかって腐敗したことがなかったならば、その罪のない状態において、真理と至福とを、安心して楽しむことができたであろう。また、もし人間が、初めからただ腐敗しているばかりだったならば、真理についても、至福についても、何の観念も持たなかったであろう。だが、不幸なことには、そしてそれはわれわれの状態のなかに何の偉大さもなかったとする場合よりももっと不幸なことであるが、われわれは幸福の観念をもっていながら、そこに到達することができないのである。

われわれは真理の影像を感じながらも、嘘ばかりしかもっていない。

絶対に無知であることも、確実に知ることもできないのである。L131-B434

ここには懐疑論の全幅の展開があると言える。われわれの起源の不明、夢の仮説を出してすべてのものを疑う姿勢は、デカルトの遺産であろう。デカルトは、人間はコギトや理性によって真理に達しえると考える。だがパスカルの根本には、人間本性は真理の観念を持てない立場にあり、真理を所有し保管する資格はないというペシミズムがある。懐疑論の結論が「真理はわれわれの力の及ぶ範囲にはなく、われわれの獲物でもない」ということであるなら、信仰なしにはパスカル自身ピュロニアンそのものである。古代懐疑論者と違う点は、ただ真理が神において宿るとする点のみであるほどである。だが、これだけならモンテーニュの思想と違わないし、アウグスティヌスやトマスの認めるキリスト教の真理論と選ぶところがない。パスカル的懐疑論の独自な点は、引用の最後の部分にある二律背反の思想だと思われる。人間の真の本性として、真理を知りえないのに知りたいと思うということがある。人間が本来まったくの無知であるならば真理など気にもかけないものを、あたら知恵の木の実を食したがゆえに、つねに真理を知りたく思うようになっている。本来真理を知りえないにもかかわらずである[8]。「われわれは真理を望む、しかしわれわれのうちには不確実しか見い出さない。われわれは真理と幸福を望まないわけにはいかない。しかし、確実さにも幸福にも達することができない」(L401-B437)。そこで人間は真理の影像(image)を感じるのみで、ただ無知と全知との中間を漂うことになる。この実存的な二律背反の発想は、人間が偉大と悲惨との矛盾をうちに持つという一貫した思想に由来するものであろう。これはデカルトにはない考えである。この矛盾ないし背反をどう克服するか、それが信仰に委ねられることは言うまでもない。

### (2) 幾何学的真理

第二は幾何学的真理の視点である。これは理性の示す明晰判明な真理のモデルであり、それ自体は疑いもなく明証的であると認められる。だが、デカルトと違ってパスカルは理性の限界を強く意識することになる。

周知のように、パスカルは神学と自然学とでは真理の基準が違うと考えた。

すなわち、神学においては「権威(autorité)が真理と不可分の関係にあり、われわれは権威を通してのみ真理を知りうる」。だが自然学や数学などのように、感覚や推理(raisonnement)のもとにある問題においては、権威は無用である。それらは理性によってのみ知られるべきものだからである。逆に言えば、神学においては権威の代わりに推理のみを用いてはならず、自然学においては推理や実験の代わりに権威を持ち出すべきではない（*Préface sur le traité du vide.* M.II. pp. 778－779)、とした。ここで問題は権威ではなく理性である。理性的推論の正しさを主張する二つのテキストを見てみよう。

真理の研究には三つの目的がありうる。第一は真理を追求する時には、それを発見(découvrir)すること、第二は真理を所有する時には、それを論証(démontrer)すること、第三は真理を吟味する時には、真を偽から識別(discerner)することである。わたしは第一については語らない。特に第二を取り扱いたい。それは第三をも包含する。なぜなら、われわれは真理を証明(prouver)する方法を知れば、同時に、それを識別する方法をも知りうるであろう。それというのは、真理について与えられた証明が、既知の規則と一致するかどうかを吟味すれば、その真理が確実に論証されているかどうかもわかるからである。

これらの三つの分野においてすぐれている幾何学は、未知の真理を発見する術を明らかにした。それは幾何学が解析(analyse)と呼んでいるものである。しかし、それについて説くことは、すでに多くのすぐれた著述が書かれたあとでは、無益であろう。すでに見いだされた真理を論証し、その証明が不可抗(invincible)であるようにそれらの真理を解明(éclaircir)する術こそ、わたしが述べたいと願っている唯一のものである。そしてこのためには、そのさい幾何学が守っている方法を説明すればよいのである。なぜなら、幾何学はその術についてなんらの論議をもしないが、その実例によってそれを完全に教えてくれるからである。・・・

ゆえにわたしは論証とはどんなことであるかということを、幾何学の論証を例にして理解してもらいたいと思う。幾何学は人間の学問のなかで、誤らない(infaillible)論証を提起するほとんど唯一のものである。なぜなら、それだけが真の方法を守っているのに対して、他のすべての学問は必然的にある種の混乱を含んでおり、そのことを十分に認識しうるのは幾何学者だけだからである。最も卓越した論証を形成すべきこの真

の方法は、それに到達することが可能であるとしたら、二つの主要なことがらから成り立つであろう。一つは、あらかじめその意味を明確に説明しなかった用語は一つも用いないこと、他は、既知の真理によって証明されなかった命題は決して提出しないこと、つまり、約言すれば、あらゆる用語を定義し、あらゆる命題を証明するということである。*De l'esprit géométrique*.M.III.pp. 390－393

ここで問題なのは未知の真理を発見する術ではなく、既知の真理の論証である。ある命題 p がなぜ不可抗的に真と言えるのかを説明し、なぜ間違いないと言えるのかを解明することである。それは、それが幾何学の方法に従っているからである。つまりそこには、用語の明晰な定義と命題の完璧な証明があるからである[9]。この二つが、命題 p が真であると見なされることの条件である。命題の真理条件は、ことがらの明証性と内的整合性（無矛盾性）であると考えられている。そのとき人間理性は、その命題には一点の曇りもないと確信し、それに不可抗的に同意するのである。パスカルは、幾何学的真理についてこれ以上の説明を求めることはできないとする。なぜなら「幾何学を越えるものはわれわれをも越える」(*De l'esprit géométrique*.M.III.p.393）からである。これはデカルトの方法であり、デカルトの立場であったことは言うまでもない。この傾向は次のノエル神父あて書簡において最も顕著である。

真理を認識しようということを問題にしているあらゆる個々の問題に適用されるべき、一つの普遍的な規則を申し述べさせて頂きたいと存じます。・・その規則とは、すなわち、ある命題が提示された場合、肯定しあるいは否定しようとしているその内容が次の二つの条件のいずれかを満足するものでないかぎりは、それに対して、決して否定あるいは肯定の決断的判断を下さないということです、その二つの条件とは、まず一つは、そのことがらが感覚の領域に属するか理性の領域に属するかにしたがって、感覚にあるいは理性に、おのずから明晰判明にあらわれて、精神はその確実性を決して疑うことができないということです。このようなものを私たちは原理または公理と呼びます。・・・もう一つの条件は、そのことがらが、上のような原理あるいは公理から正しく導きだされた諸帰結によって演繹されたものであるということです。・・・以上述べた二つの条件のうちのいずれかを満足するすべてのことがらは、確

実で真なるものです。が、そのいずれの条件にもあてはまらないことがらは疑わしく、不確実なものとみなされるのです。*Au Père Noël 29 octobre 1647*.M.II.p.519

真理の条件として、ことがらの明晰判明さと原理からの正しい演繹とが挙げられている。これが、ある命題が確実で真であることの条件である。言うまでもなく、きわめてデカルト的な真理条件である。たとえば『哲学原理』序文によれば、哲学の原理には二つの条件が必要であり、第一はその原理がきわめて明晰で明証的であってその真理性が疑いえないほどであること、第二は原理からの演繹の全過程のうちにきわめて明白なもの以外の何ものもないこと(AT.IX-2.p.2)である。上の引用文には、この二条件がほとんどそのまま採用されている観がある(10)。『方法序説』においても、第二部で周知の明証性の規則が示される他に、「第一の真理から私が演繹した他の真理の連鎖のすべてをここで示したい」(AT.VI.p.40)という言い方がなされている。『規則論』の第三規則では「知識への最も確実な二つの途」として、精神の明証的直観と確実な演繹（AT.X.pp.369－370）とが挙げられている。要するにデカルトは、哲学は疑いえない第一原理と、そこからの演繹によって構成されてはじめて確実な知識の体系になると考えている。この思想をパスカルはここではそのまま継承し、幾何学的真理はデカルト的方法によって確実に捉えることができると考えていたと思われる。

だが、実はパスカルはそうした理性の真理に満足するものではない。それは全力を傾注すべきものではないと言う。

幾何学について腹蔵なく申せば、私はこれを精神の最高の訓練とは考えていますが、また同時に、それが本当に無益なものだということをよく承知しておりますので、単なる幾何学者にすぎない人と器用な職人との間に、殆ど相違を認めないのです。それ故私は、幾何学をこの世で最もすぐれた職業（メチエ）とは呼びますが、結局それは職業（メチエ）にすぎないのです。・・それはわれわれの力を試すのには適していますが、自分の力を傾倒するに足るものではないのです。*A Fermat 10 août 1660*.M.IV. p.923

私は長いあいだ、抽象的な諸学問の研究に従事してきた。そして、それらについて、通じ合うことが少ないために、私はこの研究に嫌気がさ

した。私が人間の研究を始めた時には、これらの抽象的な学問が人間には適していないこと、またそれに深入りした私のほうが、それを知らない他の人たちよりも、よけいに自分の境遇から迷いだしていることを悟った。L687-B144

幾何学が無益であるとは、単に幾何学が人間研究の役に立たないということだけではなく、およそ外的事物についての抽象的な諸学問は、人間の内面にまで浸透することはなく「私を慰めない」（L23-B67）ということであろう。たしかに幾何学は論理的な秩序を厳格に守る確かな学問である。「だが数学はその深みにおいて（深さにもかかわらず）無益である」(L694-B61)。幾何学的精神によっては、人間の魂や神の問題を十分に扱うことができないからである。われわれが全心を傾けるべきなのは、こうした問題であって幾何学に対してではない。この問題を前にして数学的理性は沈黙せざるをえない。おそらくこう考えてパスカルは、幾何学的真理の確実性を認めながら、他方で理性の限界を強く主張していると思われる。実際かれは一時期、科学研究を離れたこと（いわゆる世俗時代）が知られている。

理性に止めをささなければならない。・・・理性は真理を把握するに足る力と手がかりとを持っているかどうかを見ることにしよう。L76-B73

理性の最後の歩みは、理性を超えるものが無限にあるということを認めることにある。それを知るところまで行かなければ、理性は弱いものでしかない。L188-B267

理性の否認ほど理性にふさわしいことはない。L182-B272

理性は全体的真理を知る力も手がかりももたない。理性が自己を否定し、みずからを越えるべきことを教えるのが理性の役割であるかのごときである。たしかに幾何学的真理の確実性は理性そのものの明証性にある。だが本当の真理は理性の射程を越えたところにある。理性は人間精神をそこまで導いてそれを知らせる。そしてそこで引導を渡して、みずからはそれ以上は行かずに真理探究の道から退く。これがパスカルの考える理性の分限である。独断論と懐疑論とを断罪した後にかれは言っている、「へりくだれ、無力な理性よ。だまれ、愚かな本性よ。人間は人間を無限に越えるものであるということを知れ。そして君の知らない君の真の状態を、君の主から学べ。神に聞け」(L131-B434)。こ

れは、本当の真理が理性を越えた信仰にあることを示している。理性はへり下り、理性を超えたものがあることを認め、そして信仰の教えるところに従わなければならない、とパスカルは考える。

> 服従。疑わなければならないところで疑い、断定しなければならないところで断定し、従わなければならないところで従わなければならない。そのようにしない者は、理性の力を理解していないのである。L170-B268

懐疑論者は従うことを知らないがために、すべてを疑った。幾何学者は証明の何たるかを知らないがために、すべてが証明できると断定した。従順なキリスト者は判断すべきことを知らないがために、すべてに従った。しかし理性の力を本当に知る者は、状況に応じて、しかるべきところで疑い、断定し、従うことが大切である。理性が疑い、断定することも時には必要であろう。だがパスカルの主張の力点は、理性が驕りを捨ててみずからを低くすることにある。「理性の服従と行使。そこに真のキリスト教がある」(L167-B269)。理性がその能力を使用しながら信仰の真理に従うことは矛盾ではない。キリスト教は理性しか認めないわけでも、理性を排除するわけでもない（L183-B253)からである。それは理性を超越するがゆえに不合理性を免れ、理性を信仰の真理の下に置くがゆえに超自然性を有していると考えられている。「もしすべてを理性に従わせるならば、われわれの宗教には神秘的、超自然的なものが何もなくなるだろう。もし理性に反するならば、われわれの宗教は不条理で、笑うべきものとなろう」(L173-B273)。

デカルトは数学的論証を疑うことによって理性の根拠を問い、真理を神の誠実のうちに見い出した。神の誠実とは宗教的信仰に属することではなく、あくまで形而上学的理論のことである。これに対してパスカルは真理を求めて理性を超越し、理性を従わせる。かくして心情の領域へ、さらには信仰へと赴くのである。無神論者の武器である理性の空しさを示して、人間精神を宗教の道に導くという発想は明らかにモンテーニュのものである。だが理性と対照的な心情という認識原理は、モンテーニュにもデカルトにも見い出されないと思われる。次に心情の領域を見なければならない。

### (3) 直感的真理と心情

心情において直感される真理というものがある。パスカルの言う心情(cœur)はきわめて多義的であり、これまで夥しい研究がなされてきた。かつてラポルト[11]が指摘したように、心情の関係する領域だけでも、信仰、繊細の精神、道徳的意識、美的趣味、公理などに及ぶであろう。そのようなことがらの直感は、所詮は個人の主観的判断によることだと言えるかも知れない。だが、パスカルにおいて心情は単なる感覚や感情のはたらきではない。スリエ[12]によれば、心情は『聖書』に起源をもつ伝統的な言葉であり、そこでは知性や意志などの精神的機能と生命維持のための生理的機能とが一体となっている。アウグスティヌスは前者の機能のみを取り出し、それがパスカルに流れ込んでいると言う。ただ、心情は理性に還元されるものではないし、意志と同一でもないだろう。日本語の「こころ」に近いが、それだけではあまりにも漠然としている。要するに一義的な定義は困難である。だが、シュヴァリエなどのこれまでの解釈[13]を総合するに、心情とは人間のあらゆる知的な営みの本源にある、内的かつ直接的な認識能力であり、いわば頭で知るよりも心で捉える（感じる、愛する）ことに重点が置かれる、と理解しておいて差し支えないであろう。ここでは心情によって照らし出される直感的真理という点のみを考える。

では、心情において直感される真理とは何か。パスカルは心情によって第一原理を知りえ、それによって懐疑論を突破できるとする。これは重要な言明である。それに反する言明（第一原理も疑える）もあるにはあるが、以前に指摘したように、それは心情の領域であるゆえに理性では疑えないと、ここでは解しておく。

> 本能、理性。われわれには、どんな独断論もそれを打ち破ることのできない、証明についての無力がある。われわれには、どんな懐疑論もそれを打ち破ることのできない、真理の観念がある。L406-B395
>
> 心情、本能、諸原理。L155-B281
>
> われわれが真理を知るのは、理性によるだけでなく、また心情によってである。われわれが第一原理を知るのは後者によるのである。それに少しも関与しない理性が、それらの原理と戦おうとしてもむだである。このことを唯一の目的としている懐疑論者たちは、無益に労しているのである。われわれは夢を見ているのではないということを知っている。

それを理性によって証明することについてわれわれがどんなに無能力であろうとも、この無能力は、ただわれわれの理性の弱さを結論するだけであって、かれらの言い張るように、われわれのすべての認識の不確実を結論するものではない。なぜなら、空間、時間、運動、数が存在するというような第一原理の認識は、推理がわれわれに与えるどんな認識にも劣らず堅固なものだからである。そして、これらの心情と本能とによる認識の上にこそ理性は、よりかからなければならないのであり、理性のすべての論議はその基礎の上に立てられなければならないのである。心情は空間に三次元あり、数は無限であるということを直感する。そして理性は、その次に、一方が他の二倍になるような二つの平方数は存在しないということを論証する。原理は直感され、命題は結論される。そして違った方法ではあるが、すべて確実に行われるのである。それで、理性が心情に向かって、その第一原理を承認したいから、それを証明してほしいと要求するのは、心情が理性に対して、その証明するすべての命題を受け入れたいから、それを直感させてほしいと要求するのと同じように無益であり、滑稽である。L110-B282

懐疑論も論破できない真理の観念とは、たとえば第一原理のことであろう。それが理性に基づくものであるならば、懐疑論の対象になろう。しかしそれは理性によって証明される種類のものでなく、心情によって直感されるものであるがゆえに疑えない、というのがパスカルの主張である。心情はいわば知的本能であって、推論（raisonnement）による認識に劣るものではない。むしろすべての理性的認識は心情による認識を拠り所とし（s'appuyer）、基礎づけられる(fonder)[14]。その意味は、はじめに心情による第一原理の明証的な直感があり、そこから諸命題が演繹的に派出するということであろう。心情の領野と理性の領野とは、あたかも繊細の精神と幾何学的精神との違いのように明瞭に相違し、互いにクロスしないとパスカルは考える。

デカルトも自然の光ないし精神の直観を人間における純粋に知的な本能と見ていた（*A Mersenne16 octobre 1639*.AT.II.p.599)。そして、直観によって知られる第一原理から多くの結論が演繹される(*Regulae*.III.AT.X.p.370)としている。ただデカルトの場合、直観（直感ではない）とは精神の直観(mentis intuitus)である。しかるにパスカルは、直感（直観ではない）は精神の領野ではなく心情の領野に属すると見る。デカルトも人間の根源的な認識力を vis cognoscens とし

て認めるが(*Regulae*.XII.AT.X.p.415)、それを心情とは言わない。若い時代のデカルトは自ら霊感を体験し(*Olympica*.AT.X.p.179)、哲学者の理性よりも詩人の想像力や霊感を評価していた時期がある(*Cogitationes privatae*.AT.X.p.217)。だがこの詩的象徴主義はすぐに捨てられるし、想像力や霊感とパスカルの心情とは同じものではないであろう。結局、デカルトは心情に相当する認識原理を積極的な意味で認めることはないと思われる[15]。

パスカルは、なぜそのような認識原理を積極的に設けることができたのか。心情にはそれなりの秩序(ordre)があるからである。

> 心情にはそれ自身の秩序がある。精神にはそれ自身の秩序があり、それは原理と証明とによるが、心情にはそれとは別なものがある。人は愛の諸原因を秩序立てて説明することによって、愛されるべきであるということを証明しはしない。そうしたら滑稽であろう。
>
> イエス・キリストや聖パウロは愛の秩序を持っていた。精神のそれではない。なぜなら、かれらはくじこうとしたのであって、教えようとしたのではないからだ。聖アウグスティヌスも同様である。
>
> その秩序は、目的を常に示すために、それと関係のある個々の点について枝葉の議論を行うことに主として存するのである。L298-B283
>
> 心情は理性の知らない、それ自身の道理を持っている。人はそのことを数多くのことによって知っている。私は言う。心情が自然に普遍的存在を愛するのも、自然に自分自身を愛するのも、自分からそれに打ち込むからなのである。そして自分の選ぶままに、一方か他方かに対してかたくなになるのである。君は一方をしりぞけ、他方を保った。君が自分自身を愛するのは、いったい理性によるのだろうか。L423-B277

ここには心情と精神との明瞭な二分法がある。精神の秩序に対して、心情の秩序とは何かが問題である。精神の秩序とは、幾何学の秩序が示すように、原理からの論理的証明であり原因による理性的説明である。これはものごとを理詰めで「教える」ことである。これに対して心情の秩序は愛の秩序である。愛の理由は外からは説明も証明もできない。たとえば、パウロは人の精神を説伏したのではなく、人の心に訴えて人間の驕りをくじいた（人の心を温めた）[16]と言う。それは「北風と太陽」の童話で言えば、外から強制するのでなく内から内発的に傾けることであろうか。また心情の秩序は（アウグスティヌスの場

合)、精神の秩序とは違って、論ずべき目的の本体に正面からアプローチするのではなく、些末な枝葉の議論をしながら目的をつねに指示すると言う。これは、心情の秩序が垂直的な直接推論ではなく、間接的な隠喩であるということか。さらに心情は、精神や理性と違ったみずからの「言語」をもつ。それは、たとえば自己あるいは神のいずれかを選んでそれに専心することである。すなわち、排他的にある対象に全心を傾倒させることが心情の理であり、それが心情の秩序の一面であると読める。要するに心情の中核には、愛するという心根の傾きがなければならない。心情における愛こそパスカルを信仰に導くものであろう。

### (4) 信仰の真理

信仰の真理は何よりも心情の直感において示される。

> 神から心情の直感によって宗教を与えられた者は、非常に幸福であり、また正当に納得させられている。だが宗教を持たない人たちに対しては、われわれは推論によってしか与えることができない。それも、神がかれらに心情の直感によって与えるのを待っているあいだのことなのであって、このことがなければ信仰は人間的なものであるのにとどまり、魂の救いのためには無益である。L110-B282
>
> 神を感じるのは心情であって理性ではない。信仰とはこのようなものである。理性にではなく、心情に感じられる神。L424-B278

信仰は人間の推論(raisonnement)のたまものではなく、神よりのたまものである(L588-B279)。すなわち、信仰は理性による推論の結果与えられるものではなく、心情の直感によって神から付与されるものである。その直感なしには信仰は人間の推論の範囲内にとどまり、魂の救済という宗教の用をなさない、とパスカルは考える。それは道徳においても同じであり、神の摂理を考慮に入れずに、死を人間にとって自然なものと考えた「セネカやソクラテスの論議は無益であり無用である」(*A Périer 17 octobre 1651*.M.II.p.853)と批判される。パスカルからすれば、モンテーニュやデカルトの場合も同様であって、要するに心情の直感という画龍点睛を欠いた信仰や道徳は魂の救いにならないと見るのであ

る。およそ神はデカルトの考えたように理性で証明されるべきものではなく、おのずから心情に感じられるものであり(Dieu sensible au cœur)、それが信仰というものである。これがパスカルの主張の基本である。だが神を心情で感じるとはどういうことか。それは、神を知るよりも先に愛するということである。神を知ることと愛することとの間には無限の距離がある(L377-B280)。ものを理性によって知ることは必ずしもそれを愛することにはならないし、愛してはじめて知ることができる場合がある。「人は真理を愛さないかぎり、それを知ることができない」(L739-B864)。真理即愛という言い方もある(L176-B261)。ここに言う愛や真理は神を指している(L926-B582)。このような考え方はまさに、アウグスティヌス的な「知らんがためにわれは信ず」(credo ut intelligam)の思想的伝統に沿うものである。そのことを『幾何学的精神について』はさらに詳しく説明している。

> わたしは神学的真理について語るのではない。それはわたしが説得術のうちに入れまいと注意しているものである。なぜなら、神学的真理は自然を無限に超えているから。神のみがそれを魂のうちに置き、好きなように置くことができる。神は、神学的真理が、心情から精神に入ることを望み、精神から心情にはいることを望まなかった。それは、意志の選択する事物の審判者であろうとするこの推理の高慢な能力をへりくだらせ、その汚れた執着によって全く腐敗したこの病める意志を癒すためであると、わたしは思う。そこから次のことが生じる。すなわち、人々は人間のことがらを話す時、愛する前に知らねばならないと言い、それが諺になっているのに、聖者たちは反対に、神学的なことがらについて語る場合、知るためには愛さなければならない、人は愛によってのみ真理に入ると言って、このことから彼らの最も有益な格言の一つを作ったのである。*De l'esprit géométrique*. M.III.pp.413－414

パスカルによれば、説得術は知性による論証と意志による説得とからなるが、神学的真理は超自然的真理であるからその限りではない。それは愛によってのみ知られると言う。それはアウグスティヌスの「人、愛によらざれば真理に入らず」(17)を受けたものであろう。先述したように、およそ「心情と精神とは、真理が魂に受け入れられる門のようなものである」(*Ibid*.p.414)。たとえば幾何学や哲学の原理は精神の門から入るが、神学の真理は愛によって心情の門から

入る。すなわち学問的真理はまず客観的に知られ、その上ではじめて愛されるであろう。しかし神的真理はまず愛され、しかるのちに精神に受け入れられて確実に知られることになる。知って愛するのではなく、愛して知るのである。愛すること（気に入ること）なしには知りえないという認識の構図は、趣味判断など繊細な事物の判断についても適用されるだろう。ある人が音楽が好きだという場合、好き嫌いに理由はない。それは当事者にしか分からないことであり、他人には説明できない。ただ感じてもらうしかない。「自分で感じない人々に（繊細な事物を）感じさせるには、際限のない苦労がいる」(L512-B1)。神を心情で感じるという場合も、秩序は異なるが同じことではないのか。ただパスカルが、心情の直感によって、愛の秩序において信仰の真理を受けとると主張するとき、それはもはや哲学の営みを超えた宗教の次元のことである。理性神学でなく啓示神学の話をしていることになる。懐疑論からかろうじてパスカルを救い出すのは、心情によって感得される愛であり信仰にほかならない。

信仰の真理という問題を改めて直視しよう。これは神から啓示され、心情において受け取れられる超自然的な秩序としての愛であり、それがパスカルの真理論の最高到達点であることは言うまでもない。ここで真理とは、幾何学や論理学の真理ではないし、哲学の第一原理などでもない。真理とはキリストであり(L600-B440)、神である(L99-B536)。「教会の歴史は本来真理の歴史と呼ばれるべきである」(L776-B858)と言う。神の国はいまだ存在しないので「地上に真理の国なし」(L840-B843)とも言われる。要するに、歴史としてのキリスト教の全体を真理と言うのである。では信仰の真理の内容はどういうものなのか。理性がへり下るとき、心情の目にいかなる地平が見えてくるのか。それを最もよく説明するのが、有名な「三つの秩序」(19)の断章である 。

> 身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。この世の偉大のあらゆる光輝は、精神の探究にたずさわる人々には光彩を失う。精神的な人々の偉大は、王や富者や将軍やすべて肉において偉大な人々には見えない。神から来るのでなければ無に等しい知恵の偉大は、肉的な人々にも精神的な人々にも見えない。これらは類を異にする三つの秩序である。・・・世には肉的な偉大にのみ感心して、精神的な偉大などはないかのように思っている人々があり、また、精神的な偉大にのみ感心して、知恵のうちにさらに無限に高いものはないかのように、思っている人々がある。

あらゆる物体、すなわち大空、星、大地、その王国などは、精神の最も小さいものにもおよばない。なぜなら、精神はそれらすべてと自身とを認識するが、物体は何も認識しないからである。

あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれらのすべての業績も、愛の最も小さい動作にもおよばない。これは無限に高い秩序に属するものである。

あらゆる物体の総和からも、小さな思考を発生させることはできない。それは不可能であり、ほかの秩序に属するものである。あらゆる物体と精神とから、人は真の愛の一動作をも引き出すことはできない。それは不可能であり、ほかの超自然的な秩序に属するものである。L308-B793

はじめに身体、精神、愛の三つの距離関係が対比されているが、それはむろん単純な比例関係ではない。身体と精神との間には無限の距離があるが、精神と愛との間には無限大に無限の距離があると言う。つまり、身体と精神とでは延長と思考という質の違いはあるものの、それらは同じ自然的秩序(ordre naturel)に属する。しかるに愛は超自然的秩序(ordre surnaturel)に属する。愛は、身体や精神とは秩序を同じくしない。非連続かつ比較を絶しているという意味で、愛は自然の秩序を超え、無限に高い秩序に属するとされる。さて身体の秩序(ordre du corps)とは、王や富者などが属する世俗の感覚的・物体的世界である。これは一種の感覚主義に立っており、大抵の人はこの秩序の下で自己充足するであろう。感覚以上のものを求める必要がないと考えるとき、精神の世界などは目に入らないし、目に見えないものは存在しないとさえ思われるだろう。だが、身体の秩序においていかに隆盛を極める人も、精神を事とする人々の前には色褪せるとパスカルは言い切る。身体の秩序は、本質的に精神のそれに劣るからである。かの大王アレクサンドロスも、その師アリストテレスの前では顔色なしということだろうか。これに対して精神の秩序(ordre de l'esprit)とは、学者が対象とする理性的・精神的世界である。身体と精神との間には無限の開きがある。身体（物体）をいくら寄せ集めても思考を生まない。それらの本質が原理的に違うからである。「考える葦」の断章が示すように、人間の尊厳は考えることにある。精神は意識をもって思考するが、物体は思考しない。人の胸中の小さな思考は星辰の大にも優る。「宇宙は空間によって私を包むが、私は思考によって空間を包む」(L113-B348)。考えるという点に物体に対する精神の優位がある。精神の世界の偉大さは世俗の人には見えないが、精神の目には見え

るのである。精神的思考の世界と物体的延長の世界とを峻別し、その間に明瞭な優劣を認めること、ここまではデカルト的二元論そのものであると言える。

だがデカルトと決定的に異なる点は、第三の秩序として心身の秩序を超越した愛の秩序を置いていることである。物体や精神を山と積んでも、最も小さな愛にも達しないと言う。世界に冠たる長者も不世出の天才も、その故をもって一少女の真心を得ることができぬが如きであろう。愛は感覚や理性ではなく心情の領域に属する。それゆえ心情の目(yeux du cœur)をもたないかぎり、この地平は感覚的な人にも、精神的な人にも見えてこない。だが、自然的秩序を超えた無限の高みにあるという、この愛とはいったい何であるのか。パスカルの出している例はアルキメデスとイエス・キリストである。ともにローマ人によって殺された人物である。前者はシラクサ生まれの貴族にして学者であり、精神の光輝の代表である。後者はナザレ生まれの貧しいユダヤ人である。学問はないが慈愛に満ちた神の子と目される。二人は生きる世界がまるで違う。アルキメデスは数の比例を永遠真理に数え、幾何学的真理や諸元素の創造者としての神を考えたかも知れない(L449-B556)。ここまでは自然の秩序の範囲内のことであり、理性で了解できる領域であろう。だがパスカルは、それでは救いにならないと考える。心情を満たし、人の魂を救うためには、理性を越えたものを求めなければならないとする。これに対してイエスは、われわれに救いの手を差し伸べ、愛と慰めとを与えてくれる。魂と心情とを満たしてくれる。愛は精神の秩序にはない、心の温もりと平安を与えてくれる（L599-B908)。この意味で愛は精神を越える。理性で神を知るのでなく、心情で感じ、全身全霊をもって愛する。このとき人は、身体や精神の秩序からいわば離陸し、無限に高い秩序へと飛翔するであろう。それが「愛によってのみ人は真理に入る」ということであろうか。そのとき、もはやわれわれはこの世界に生きているのではない。『メモリアル文書』が示すように、自己を捨て、神以外のこの世のすべてを忘却し、永遠の生命において生きている(M.III.pp.50－51)。まさに「もはやわれ生くるにあらず、キリストわが内に在りて生くるなり」(『新約聖書』ガラテア書 2:20）である。パラダイムの大転換、自己の生の脱構築である。これこそ愛の秩序に入ることであり、ここに信仰の真理の神髄ありと言えよう。

「三つの秩序」は、パスカルの信仰についての考え方を最も簡潔に物語るフランス語の名文として、これまで多くの人によって言及されてきた[20]。このうち比較的最近のマリオンの研究によれば、精神の秩序から愛の秩序への移行においてエゴの哲学が覆えされている。つまりデカルトは精神の秩序におい

てエゴに合法的な優位を認めていたが、パスカルはエゴを嫌悪し、愛の秩序において神を愛することによって、それを失格させたとする[21]。たしかにエゴの滅殺ということがあろう。だが自我を超えて愛の秩序を語ることは、神を語りイエス・キリストを語ることである。信仰の真理の内容はすなわち啓示の世界である。それは理性を超出した領域であり、自然の秩序において生きている者には理解不能とせざるをえない。

デカルトが認めうるのは二つの自然的秩序までである。超自然的秩序は哲学において問題とすべきでないと考える。「啓示の真理はわれわれの理解を越え、それを吟味するには神の特別な協力を必要とし、人間以上でなければならない」(*Discours*.I.AT.VI.p.8)からである。むろんデカルトも信仰や愛を語ることが少なくない。すなわち、信仰は精神の作用でなく意志の作用であるが(*Regulae*. III.AT.X.p.370)、信仰そのものは神のたまものである(*Meditationes*.AT.VII.p.2)。信仰は曖昧なものを対象とするといわれるが、それを信じる理由は曖昧ではなく自然の光に照らされている(*Secundae Responsiones*.AT.VII.p.147)。神の啓示は知恵の段階を踏まずに、一挙に信仰へとわれわれを高める(*Principes*.AT. IX-2, p.5)。そういう信仰の真理を私の信念の第一位に置いていた(*Discours*.III.AT.VI.p.28)。神人（キリスト）は神の創った驚くべきものの一つである(*Cogitationes privatae*. AT.Xp.218)、などと言われる。また愛については、自然の光だけで人は神を愛することができるし(*A Chanut 1er février 1647*. AT. IV. p.607)、愛と知は結合されるので、神を愛する人はすでに神を認識している(*Sextae Responsiones*. AT. VII. p.429）としている。

しかし、この愛はパスカルの言う愛の秩序でなく、精神の秩序に属するものであろう。また信仰については、デカルトはそれをひとまず別にし(*Discours*.III.AT.VI.p.28)、「信仰の光の助力なしに自然的な理性によって」(*Principes*.AT.IX-2,p.4) 真理を探究するのが、かれの哲学の基本的姿勢である。たしかに「神によって啓示されることは、すべてのうちで最も確実なこととして信じるべきである」が、それ以外のことについては理性によって探究すべきである(*Principia* I.76)と考える。かれは宗教は固く信じるものの、明証的な自然理性の説得するものにより強く心を動かされる(*A Huygens 10 octobre1642*. AT. III. p.799) 人であった。デカルトは『省察』本文でわざわざアルキメデスの名を挙げ、かれが地球を動かすために確固不動の点を求めたことに触れている(*Meditationes*.II.AT.VII.p.24)。確実性の探究においてパスカルがイエス・キリストに倣うなら、デカルトは明らかにアルキメデスに倣っているのである。そし

て哲学者が受け持つ領域はあくまで自然的秩序であり、それ以上の領域には踏み込まないし踏み込むべきではないと考えているのである。デカルトが携わるのは形而上学であっても宗教ではない。信仰とはどこまでも一線を画し、信仰に認識の問題を預けることはしないのである。デカルトにはデカルトなりの哲学の限定があり、それを越えてものを言おうとするパスカルを退けるだけの十分な理由がある。たとえば、哲学の問題として確実性の起源や真理の根拠が問われているとき、それが神によって啓示された信仰にあるとするのでは意味をなさない。むしろ永遠真理創造説や神の誠実性を援用するなどして、ことがらを理性的に説明することが求められるのである。この知的作業なしには、万人に理解可能なものとはならないからである。デカルトのこの姿勢は、ライプニッツの評したように「真理の控えの間にとどまる」(*Leibniz à Rémond 10 janvier 1714*.G.III.p.607)ことであるかもしれないが、むしろそれが哲学者の節度というものであろう。

他方パスカルは、自らを哲学者と限定することを拒否している。かれの問題は、部分でなく存在の全体にかかわることであり、ものの外面でなく本質を究めることであった。「哲学を軽蔑することこそ真に哲学することである」(L513-B4)とかれが胸を張るとき、それはスコラのみならずデカルト哲学をも指していたであろう。パスカルは、確実性や真理という問題の根本に信仰があることを示唆していると思われる。それは理性では証明できない領域である。デカルトは「真理の探究とは戦いを挑むことである」(*Discours*.VI.AT.VI.p.67)としたが、パスカルは「人は真理のために戦う使命をもつけれども、・・真理は自分が証明すれば誰にでも信じさせられるものと頭からきめてかかっている人々に対して、憤りに堪えなかった」(*A Périer le printemps 1657*.M.III.pp.1206－1207)と言っている。これはデカルトを意識したものとも読める。

要するに、確実性や真理などの認識の問題には、広い宗教的奥行きがあることをパスカルは示していることになる。それを見ようとしないうちは問題の根本的解決は得られない、宗教に拠らないかぎり哲学の問題は最終的に決着しない、とかれは考えていたであろう。かくしてパスカルは真理を求めて宗教の領域へと足を踏み入れ、奥の院にまで行くのである。すなわち自然的秩序から超自然的秩序へ移行し、愛によって哲学を決定的に超出するのである。これがパスカルの歩んだ道である。この道を行けば、デカルト哲学は完膚なきまでに解体され、宗教へと変容を余儀なくされることになるだろう。「三つの秩序」はそれだけの破壊力を擁している。キリスト教哲学を志向したマルブランシュ神

父でさえ、そこまでラディカルではなかった。筆者自身は哲学者デカルトの道に与するものであり、パスカルの姿勢の是非は問わずにおくとしても、十七世紀の哲学において認識問題の宗教的な広がりを示す、最も鋭く鮮やかな思想の一例がここにあることは間違いない。

## 注

(1) 以下、パスカルからの引用は現在刊行中の *Œuvres Complètes de Blaise Pascal*, Texte établi, présenté et annoté par Jean Mesnard. Tome. I.-IV. Desclée de Brouwer. Paris. 1964－1992 からとし、それを M と略記する。『パンセ』からの引用については、ラフュマ版とブランシュヴィック版の番号を L60-B294 などと並記する。 OC = *Œuvres Complètes de Blaise Pascal*, par L. Lafuma. Aux Editions du Seuil 1963. 他方、デカルトからの引用は、*Œuvres de Descartes,* publiées par Charles Adam & Paul Tannery. J. Vrin. Paris. 1996.からとし、それを AT と略記する。

(2) メナールはパスカルの真理を、懐疑論の真理、心情の真理、啓示の真理の三段階に分けて簡潔に分析している (J. Mesnard, Pascal et la vérité, in *Chroniques de Port-Royal* N. 17－18. 1969)。われわれはそれに幾何学的真理を加えるのみである。なおこのメナール論文については、飯塚勝久『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』(pp. 293－296)を参照し、益を受けた。

(3) パスカルはデカルトを「理性の博士」(le docteur de la raison)と呼んでいたと言う。M. I. p. 893

(4) モンテーニュ『エセー』第 2 巻第 12 章「山のこちら側では真理で、向こう側では虚偽であるような真理とは何であろうか」(岩波文庫版 第 3 巻、p.274)。

(5) もっとも、そこには必ずしも理性のはたらきが関わっているとは思われない。デカルトもある程度懐疑論に沿う議論をしており、感覚や想像力の捉える真理を却下する。しかし理性が明晰に捉える真理は基本的に正しいとする。

(6) もっとも、そこには必ずしも理性のはたらきが関わっているとは思われな

い。デカルトもある程度懐疑論に沿う議論をしており、感覚や想像力の捉える真理を却下する。しかし理性が明晰に捉える真理は基本的に正しいとする。

(7) 前田陽一はここにパスカルの認識論の明快な表現があるとする。『パスカル』p. 55、『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』pp. 267－268

(8) 周知のように、カント『純粋理性批判』第一版序文の冒頭に、これと似た「理性の運命」が記されている。

(9) ただパスカルは、探究を進めることによってもはや定義できない原初的な語と、証明に役立てるのにそれ以上明白なものは見い出しえないほどの原理とに、必然的に到達すると考える。学問を完結した秩序の下に処理することはできないかに見えるが、自然の秩序がその欠を補うとする（*De l'esprit géométrique*. M. III. p. 395）。

(10) もっとも細部を見れば、同じ明晰判明なことがらでもパスカルとデカルトとでは、その理解が違ってくる。パスカルは、感覚においてであれ理性においてであれ、明晰判明な事態の確実性は疑いえないとし、確実性は、感覚、理性、信仰のそれぞれにおいてあると考えている。しかしデカルトにおいて「明晰判明なものはすべて真である」という基準は、事実上「理性の領域」における基準である。「感覚の領域」において明晰に現われるものは必ずしも判明ではない、とデカルトは見なすからである。

(11) ラポルトは心情の領域としてこの五つを挙げたあとで、心情の定義、認識論的価値、心情と理性の相違を論じている（J. Laporte,Le cœur et la raison selon Pascal, in *Revue Philosophique*. Janvier- juin1927. réédition. 1950）。この研究は最も標準的なものと言えるだろう。

(12) P. Sellier, *Pascal et Saint Augustin*. 1970. pp. 117－139.　スリエは、パスカルにおける心情が、意志と同義語、原始観念を直観する能力、非理性的な論議を関知する鑑識眼、繊細の精神の支配的なはたらき、神を感じる能力、内的かつ直接的な認識の座など、多義的であることを例示している。なお、スリエおよび次のリュシエの読み方に関しては飯塚勝久『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』pp. 355－356 に負う。

(13) シュヴァリエは、心情を『聖書』の用法と同じく「われわれの存在の最も内的な部分」であり、感情・道徳・認識などあらゆる知的な営みの本源、あるいはむしろ感情と理性との最尖端と見る（J. Chevalier,*Pascal*. 1922 松浪信三郎・安井源治訳、パンセ書院 1952 pp. 280－285）。リュシエもパスカ

ルの心情に『聖書』の影響を認めながら、そこに多義性と根源性とを認めている。(J. Russier, *La foi selon Pascal*. p. 156)。飯塚は諸説を引きながら、心情とは、あらゆる認識作用の根底にあって、科学、芸術、宗教を貫く人間的認識の根本的能力あり、理性と感性を包括する精神の普遍的な能力とする（飯塚、同上書 pp. 356－357)。最近ではミションが、心情の認識的機能と意志的機能という問題を再び論じている（H. Michon, *L'ordre du cœur. Philosophie, théologie et mystique dans les pensées de Pascal*. 1996. pp. 278－303)。

(14) ラランドの哲学辞典(A. Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie.*)は「心情」の例文としてこの箇所を挙げている。『幾何学的精神について』はさらに説明する。「すべてこれらの真理（数、空間などの第一原理）は論証することはできないが、それにもかかわらず幾何学の基礎(fondement) であり原理(principe)である。だが、それらの論証を不可能にしている原因が、それらの不分明さにあるのでなく、反対にそれらの極度の明証性(extrême évidence)にあるように、この証明の欠如は欠陥ではなくむしろ完全性である。ここから幾何学は・・原理を証明できないことが明らかになるが、それはそれが自然的な極度の明白さ(extrême clarté naturelle)をそなえているという唯一の有効な理由によるのである」(*De l'esprit géométrique*. M. III. p. 403)。

(15) デカルトにおいて cœur とは圧倒的に「心臓」の意味である。ただ『方法序説』に一箇所「心根」という意味の用例がある(AT. VI. p. 30. l. 28)。パスカルの心情は、むしろマルブランシュの「内的感覚」(sentiment intérieur)に近い。

(16) ブランシュヴィックは rabaisser（くじく）でなく、échaufffer（熱する）と読む。

(17) Non intratur in veritatem, nisi per charitate. (Augustinus,*Contra Faustum Manichaeum*, XXXII,18)　この一句は Jansénius,*Augustinus*. t. II.ch.VII にあると言う。

(18) ヨハネ福音書の「われは道なり、真理なり、命なり」(Jn.14：06）を踏まえている。

(19) 三つの秩序という思想の成立を考えるに、1652 年 6 月のクリスチナ女王宛て書簡において、権力と精神という「二つの王国」が語られ、精神は身体よりも上位の秩序にあると見なされている（*A Christine de Suède*. M. II. p. 924)。次いで『パンセ』L933-B460 にも「三つの秩序」が登場する。すな

わち「事物には三つの秩序がある。肉体、精神、意志である」。肉の欲にとらわれているのは富者と王者であり、精神をこととする学者は目の欲（探究心）にしたがう。賢者は正義や知恵を対象とするが誇りに支配される。この断章は L308-B793 を準備していると思われるが、ここにおける三つの秩序は、いずれも邪欲(concupiscence)に発するものであるがゆえに、愛の秩序には達しない。この読み方は J.-L. Marion, *Sur le prisme métaphysique de Descartes*. p. 332 に従う。cf. G. Rodis-Lewis,Les trois concupiscences in *Pascal Textes du Tricentenaire*. 1963, V. Carraud, Des concupiscences aux ordres de choses, in *Revue de Métaphysique et de Morale* mars 1997.

(20) J. Chevalier,*Pascal* 1922(松浪信三郎・安井源治訳パンセ書院 p. 294－), J. Russier, *La foi selon Pascal*. 1949 pp. 175－185, V. Carraud, *Pascal et la philosophie*. 1992 pp. 234－239 など夥しい文献がある。最近でも *Revue de Métaphysique et de Morale* mars 1997.は「三つの秩序」の特集を組んでいる。

(21) J.-L. Marion, *Sur le prisme métphysique de Descartes*. 1986. pp. 325－342.

(22) 拙論「デカルトの合理主義について」(『哲学研究』538 号 1979. pp. 41－48) 参照。